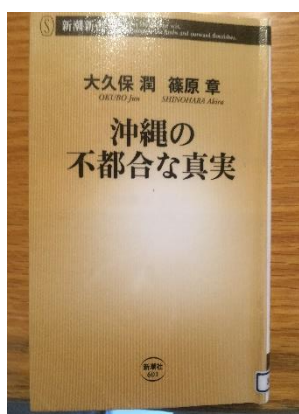


## 1 始めに

長年、沖縄問題に関わってきた大久保、篠原の両氏が議論の末に辿り着いた、「沖縄ナショナリズム vs 日本ナショナリズム」という偏狭で排他的な対立とそれによって齎される人々の分断、人心荒廃の懸念の問題意識の下に、沖縄の病巣を深く抉ってくれている。今まで抱いていた沖縄とは違うイメージ、或いは抱いていた違和感を解消してくれた。沖縄問題、貧困や基地問題を解決するために知るべき沖縄の実態を活写している。本書は沖縄批判をしているのではなく、既得権益を守る公務員を中心とした「沖縄支配階級批判」を狙いとしている（とされる。）。確かにそうなのだろうが、沖縄の実態に中々接しえない者には、大いに参考になる。

## 2 本紹介



新潮新書

著者：大久保潤氏（S38生）

日経新聞社元那覇支局長

篠原章氏（S31生）

大学教員を経て評論家、経済学博士

発行 2015年1月

定価 本体 740円

## 3 見返しカバーの書評紹介

こじれにこじれる沖縄の基地問題の本質は何処にあるのか。見据えるべきは「金と利権」の構造である。巨額の振興予算をめぐり、繰り返される日本政府と県の茶番劇。この構図が変わらない限り、問題は解決できない。公務員が君臨する階級社会、全国ワーストの暮らしに喘ぐ人々、異論を封じ込める言論空間等々、隠された現実を炙り出す。党派を問わず、沖縄問題の「解」を考えていく上で必読の書。

## 4 目次紹介

序章 沖縄はこれからどうなるのか

現実はきわめて複雑である/「心」「平和」以外の議論を/「総意」とは何なのか  
/沖縄ナショナリズム/翁長知事当選の示すもの

第一章 普天間問題の何が問題なのか

普天間問題とは何か/普天間を巡る利権の構図/なぜ政府は辺野古移設に拘るのか  
/建設会社の代理戦争だった衆院沖縄一区/振興策というエンドレスゲーム/新たな取引材料となる「自衛隊配備」/「海兵隊の代わりに自衛隊を」でも変わらぬ  
本土依存/税金の還流システム

第二章 高まる基地への依存

活発な普天間誘致の動き/基地返還に反対する名護市/辺野古の分断/なぜ「基地を返さないで欲しい」という声が出るのか/今も続く「ギブ・ミー・チョコレート」/米軍にとって「居心地の良い」沖縄/アメリカの戦略的支配からの脱却/軍事基地の八三パーセントは本土にある/基地被害を都道府県で比較するナンセンス

### 第三章 「基地がなくなれば豊かになる」という神話

誤解を与える「経済効果」という概念/「年率十四パーセント」という空想的な経済成長率の根拠/驚くべき計算過程の欠落/基地がなくなっても豊かにはなれない

### 第四章 広がる格差。深まる分断

「下流の宴」の実態/振興策は大企業のみを潤す/日本一の階級社会の実態/「結」(ゆい)の崩壊/琉球大OBという「支配階級」/辺野古も高江もエリート同士の戦い/左翼がない不幸/権力べったりの新聞/辺野古に仕事を/分裂前夜

### 第五章 「公」による「民」の支配

反戦平和の島・癒しの島の貧困/「全国最低の県民所得」が意味するもの/深刻な所得格差/公務員は沖縄の富裕層/百姓二人が士族一人を養った琉球時代/革命的な改革だった「琉球処分」

### 第六章 本土がつくったオキナワイメージ

沖縄の声を支える本土の知識人/大江・筑紫的沖縄観を自ら振る舞う沖縄人/「戦争と基地の島」という幻想/「自然の楽園」という幻想/「応援しよう」という根本的な傲慢

### 第七章 「沖縄平和運動」の実態と本質

普天間基地ゲート前の示威行動/沖縄平和運動センター/基地反対運動を動揺させた普天間基地返還合意/県民帳票は何故行われたのか/「基地反対集会に10万人」の真偽

### 第八章 異論を封殺する沖縄のジャーナリズム

ドキュメンタリー作家・上原正稔/「パンドラの箱」事件/大江賠償訴訟/訴訟になった「パンドラの箱」/「パンドラの箱」を報じないマスコミ/自費出版拒絶問題

### 第九章 「構造的沖縄差別論」の危うさ

「沖縄人」と「日本人」/「部落解放同盟の機関誌で展開/沖縄内部の矛盾を覆い隠そうとする知識人たち/構造的差別論を支持する「日本」の識者

あとがき

## 5 前記4項「目次」中の留意すべき語彙に関する説明

### ①建設会社の代理戦争(1章)

現職大臣国民民主党下地幹雄氏(実兄は建設業界会長で「大米建設」の社長)と自民党の國場幸之助氏(沖縄最大の建設会社國場組社長の息子)の決戦  
那覇空港第二滑走路を巡る戦い 沖縄紙は那覇空港の拡張と経済効果への期待に焦点

### ②税金の還流システム(1章)

辺野古県外移設の場合、5000億円の工事喪失、基地反対の声に配慮した振興策の大部分は公共工事、建設業者が潤い、政治家も政治献金として潤うという構図。半世紀も薬漬けにされた者自立し得るのか?

③軍事基地の八三パーセントは本土（2章）

自衛隊と米軍を合せた軍事基地の割合は本土83%  
米軍基地の内米軍専用地に限定すれば、沖縄74%

④経済効果（3章）

沖縄の政治家や識者、沖縄の新聞社が好んで口にする全基地返還が齎す経済効果＝9155億5千万円は、県レベルのGDPではない。粗付加価値率を乗じた5154億余りがGDPに対応する。年率14%を達成しないとこの数字は未達となる。現状基地経済効果（3255億9千万弱）をも減ずるべきだろう。

⑤全国最低の県民所得（5章）

沖縄のジニ係数は全国最悪 全国0.311（2009年） 沖縄0.339

⑥琉球処分（5章）

沖縄バージョンの廃藩置県 士族の経済的特権（秩禄・俸給）は温存・継続  
引き続き一般大衆は重税に苦しむ

⑦大江・筑紫的沖縄観（6章）

絶対平和主義者・沖縄との信仰、悲劇の島イメージ等の沖縄至上主義報道、琉球史研究の第一人者副知事の高倉氏は、「いつのまにか、沖縄人は大江健三郎と筑紫哲也が言う被害者沖縄のイメージ通りに振る舞う癖がついてしまった。」と指摘

⑧パンドラの箱（8章）

「1フィート運動」の創始者作家である上原正稔氏が、琉球新報から沖縄戦史に係る連載「パンドラの箱を開ける時～沖縄戦の記録」の第二話で慶良間諸島での集団自決は軍命ではなかったことを実証しようとしたが、問題視され、掲載拒否された。この時に、教科書検定で問題化しており、琉球新報は、検定意見の撤回キャンペーンを展開していた。

⑨大江賠償訴訟（8章）

集団自決について、沖縄ノートの大江氏や岩波書店を相手に損害賠償、出版差し止め、謝罪広告掲載等を求めた訴訟。曾野綾子氏の指摘にあるように、軍命による集団自決ではなく、遺族等援護法の適用申請のために虚偽としての集団自決である旨を主張。最高裁まで争われた。自決命令それ自体まで認定するには躊躇せざるを得ないが、大江氏らが真実と信じる相当の理由があったと言えとした。即ち、軍命があったかどうかは判定しないのであるが、琉球新報らは集団自決肯定の立場で報道展開

⑩構造的沖縄差別論（9章）

「沖縄人」と「日本人」を殊更に対置して、日本人が沖縄における米軍基地の本土移転を拒否しているのは、歴史的な差別意識があるからとの論、日本人は直ちに基地を持ち帰れと主張する。

基地縮小のための具体的なプランもなし。独立の志もなし。米軍基地削減後の沖縄についての展望もなし。「日本人は基地を持ち帰れ」という言葉だけが先走っている「構造的沖縄差別論」。これが実態だとすれば、たんなる心情論・被害者感情論に過ぎません。（本パラグラフ 同書210p）

## 6 所見等

### (1) 良くぞ活写した！

マスコミ報道のみでは解らない沖縄問題の実相を活写しており、大いに参考になった。言い難いことをはっきりと言って呉れた意義は大きい。

表面的な事柄や綺麗事のみでは何ら解決に至らない。実態を知ってこそ解決の方向性は見えてくる筈である。

### (2) 被害者意識のみを強調するばかりでは、解決は遠のく！

沖縄の実態は、被害者故に支払われる補助金に依存する経済と不徹底な琉球処分による公務員優位、基地反対派と容認派の奇妙な共存・共栄等にあるのだろう。

誰も否定も反論も出来ない被害者意識を背景にしての補助金等の要求（政府、日本は出すのが当然との意識）が残存する限り沖縄の所得格差、貧しさからの脱却は有り得ないだろう。その処方箋を提示するのは誰か？

反戦とか平和とか愛とか公平・公正とか誰も反論や批判の出来ない標語を振りかざして、自らが正義の標榜者であるかの如くに振る舞う諸氏の何と多いことか？彼等の言説には注意する必要がある。

### (3) 沖縄の総意とは

高々、半分程度の意見であっても、それが県民の総意だ等と称して、声高に叫ぶ、それが現実だ。総意でないなどとは決して言えないし、言ってはならないという空気がある。それを言えば総攻撃を食うだろう。反論や反対の認識・意見を容認しない、封殺する風潮は如何なものか？冷静で建設的な議論なくして沖縄の未来はないと言ったら言い過ぎだろうか？

美辞麗句で現実が見えなくなっている。「皆が言っている。」というが、その実態は半分程度なのだ。

或る意味では、サイレントマジョリティこそが正しく、ラジカルな者には邪な気配が漂う。何れにしろ、物言わぬ民にも目を向けるべきだ。

### (4) 基地問題について

沖縄の基地負担を減らすためには、色々な方策があるのだろう。一気に減らすことは無理だとしても、現実的な解決策は多々ある筈だ。東アジアの戦略環境や自らの防衛努力により、沖縄の戦略的価値を減ずることが出来れば、更なる基地減少も可能だろう。何れにしろ、現実的な解決策を求めることが最善だ。

米兵による事件については、日米合同による更なる防止努力が求められる。米兵の事件頻発の背景というか、彼らの心理には今なお占領軍の意識が強く残っているように思われてならない。そのような米兵の占領者意識も次第に変化する筈だ（と信じた）。

基地依存ではない確かな共存共栄の方策も有る筈だと信じるのだが・・・

### (5) 長く蜜月関係にあった仲井眞氏と翁長氏の知事選対決について

翁長知事が何故辺野古移設にあれほど反対するのか、その豹変に驚いたのは小生のみではなからう。本書では、弱体化した革新勢力を取り込み「オール沖縄」対「日本」との構図化を図ったことが勝因としているが、多分そうなのだろう。本書は、こ

の知事選は、基地政策を巡る戦いではなく、利権調整や個人的な問題が絡んでいると観るのが自然と指摘しているが、全く同意だし、そうでないと理解できない。

翁長知事当選が、辺野古移設問題を長期化させたことは事実だし、酷な言い方ではあるが、本来容認派であった故翁長知事が、権力奪取のために魂を売ったとの謗りを受けても仕方なかろう。死者に鞭打つ積りは毛頭ないが、・・

#### (6) 沖縄の自立に向けて

基地依存体質を脱しない限り、その意識や体質の改善がない限り、沖縄は自立しえないだろう。甘い汁、10兆円にも及ぶ振興費用を適切に運用出来ていたのならば、沖縄はもっと発展していたのだろう。無為に浪費されたのかも知れない。箱モノを多数つくったが、それが沖縄振興にどれほど裨益したのかが問われるべきだ。

参考：平成30年度沖縄振興予算総額 3010億円

#### 7 終りに

一読すれば、沖縄を貶めるかのような内容であるが、例えそうであっても実態を知らずして、処方箋を提示することは出来ない筈だ。正に不都合な真実なのであろうが、それらから、目を背けてはならない。

目から鱗という内容も有る筈であり、沖縄問題を語る人には一読を進めたい。

(了)